

銀雀山漢簡『守法守令等十三篇』訳註(三)

仲山 茂

凡例

本稿は、「銀雀山漢簡『守法守令等十三篇』訳註(一)」「(名古屋大学東洋史研究報告)二七、二〇〇三」・「銀雀山漢簡『守法守令等十三篇』訳註(二)」「(名古屋大学東洋史研究報告)二八、二〇〇四)に続く、銀雀山漢簡の訳註である。前稿同様、底本として銀雀山漢墓竹簡整理小組『銀雀山漢墓竹簡(壹)』(文物出版社、一九八五、以下テキストと称する)を使用している。構成は、標題、原文、書き下し文、註、訳文の順序からなる。その際、原文・書き下し文における数字は簡番号、□は一字不明、……は字数不明、【】は文意より欠字を補ったもの、()は異体字もしくは通假字をそれぞれ意

味する。また書き下し文に附した註は訳註者によるものであるが、必要に応じてテキストにある註釈を原註、劉海年・楊升南・吳九龍『中国珍稀法律典籍集成』甲篇第一冊(科学出版社、一九九四)の註釈を『珍稀』として紹介している部分がある。

王兵篇

四¹

(1) 原註によれば、本篇所収の各簡の内容は『管子』の参患・兵法・地圖等の篇、また同七法篇中の小篇である選陳・為兵之数(以下、これらの篇をそれぞれ単に参患・兵法・地圖・選陳・為兵之数と呼ぶ)にみられるも

のであり、これらを参照して一篇としたという。また、872簡に「王兵」の語があり、標題木牘にも「王兵」がみられるため王兵篇としたとする。本篇と共通する内容をもつ『管子』諸篇の形成について、原註は『管子』諸篇が王兵篇もしくはそれに類似する内容を底本とし、それを分断し、文章を付加するなど加工してできあがったものとみる。王兵篇と『管子』諸篇の対比はテキストの附録「『王兵』篇与『管子』相關各篇对照表」において行われ、さらにその後記で『管子』諸篇が王兵篇を改竄したものである痕跡が指摘される。その要点をあげると以下ようになる。

一、参患の冒頭部に論旨とは直接の関係のない文章が存在する。

二、為兵之数の末尾に、これも論旨とは直接の関係のない文章が置かれる。

三、簡文の863簡から865簡にかけては雷電・飛鳥・風雨の比喩を用いて論を展開させるが、『管子』ではその冒頭部が為兵之数に、続く部分が選陳に分断される。

四、三で指摘した選陳では、雷電・飛鳥・風雨に加え、

さらに水旱・金城・一体の比喩が用いられるが、その論の展開を王法篇と対比した場合、王兵篇と一致する雷電・飛鳥・風雨に関する部分では論理的関係が緊密であるものの、水旱・金城・一体の部分ではそれほど緊密ではない。

五、王兵篇872簡「王兵者必三具」以下は地図の後半と共通する内容をもつが、王兵篇の場合、この部分は一篇の総括にあたり、地形を論じたその前の部分とは直接の関係がなくとも大きな問題はない。しかし、地図の場合は冒頭部から地形に関する記述が続くため、この部分が浮いてしまう。

王兵篇と『管子』諸篇の関係については、これ以外に金谷治『管子の研究』（岩波書店、一九八七）が王兵篇の方がより古いらしいとしながらも、『管子』諸篇にもそれなりのまとまりがあるとし、さらに原宗子「銀雀山出土『守法』『守令』等十三篇の示す自然環境——『王兵篇』を中心に——」（『中国出土資料研究』創刊号、一九九七）は王兵篇が『管子』諸篇よりも遅れて成立したものである可能性を示唆している。『管子』と王兵篇が共通の素材から派生してきたことはほぼ確実であるが、どちらが

より古いものであるかは議論の余地がありそうである。とはいえ現時点では、やはり王兵篇の方がより古いものであるとみておくべきだろう。論理構成などの大きな問題についてはテキストの附録や原氏が言及しているため、細かい点を指摘しておく、858簡から859簡にかけての「故不明適国之制者不可伐也。不知其蓄積不能約、不明其士卒弗先戰、不審其將不可軍」の部分は、原註が現行本『管子』より簡文に近いとする『通典』引『管子』では「故不明敵人之攻不能加也、不明敵人之積不能約也、不明敵人之將不先軍、不明敵人之士不先陣」に作る。『通典』引『管子』は各句で「不明」・「敵人」を用いるが、「不能」と「也」を用いる上二句と、「不先」を用い「也」を用いない下二句に区分され、二句二句の構成となっている。これに対し簡文では「適国」・「也」は初句のみ、「不明」は初句と第三句、「不可」は初句と第四句で用いられ、初句と下三句という構成になっている。この部分について、簡文と『通典』引『管子』のどちらかが、一方を直接の文本にして改変したものと仮定すれば、前者の初句と三句というアンバランスな構成を整えて後者の二句二句の構成ができあがった可能性の方が、その逆

よりもよほど高いと考えられる。少なくとも『管子』の方が、より多くの手を経て改変されている可能性が高いとはいえる。

なお、本篇の原註は、詳細に『管子』諸篇との対比を行っている。今回の訳註における『管子』との対比も、そのほとんどが原註の成果を取り入れたものであるが、煩雑であるため、原註によるものであることを一々註記しない。また、『管子』の引用においては、本篇との対比を目的とする場合、字句の差異を明確にする必要があることから、原文のみをあげ、書き下しは行わないこととする。

王兵¹ 851

(一) 標題簡であり、前稿の831簡「庫法」と同様の特徴をもつ。

主所以卑尊貴賤、国所以存亡安危者、莫鑿於兵。故【】誅暴乱、伐不道、必以兵、□□姦邪、閉塞852奇施、必以刑。然則兵者古(固)所以外誅乱、内禁邪。故兵者、尊主安国之

主853……地必損而国必危矣。内不用854……壹至、参(三) 至当壹戰。故□□□□855……勝者。攻城围邑、主人渴(竭) 尽、易子而食之856……非以圜也。見勝而起、不見勝而止。故計必先定、然后兵可以起。計未定而兵起者、兵自怠者也857……

主の卑尊貴賤たる所以、国の存亡安危する所以の者は、兵より鑿たるは莫し。^① 故に【□】暴乱を誅し、不道を伐つに、必ず兵を以てし、□□姦邪、奇施を閉塞852するに必ず刑を以てす。^② 然らば則ち兵とは古(固) より外に乱を誅し、内に邪を禁ずる所以なり。^③ 故に兵とは、主を尊くし国を安ずるの主853……地は必ず損われて国は必ず危うし。内に……を用いず854……壹至、参(三) たび至るは壹戰に当つ。^④ 故に□□□□855……勝者。^⑤ 城を攻め邑を囲み、主人渴(竭) 尽し、子を易えて之を食らい856……圜を以てするに非ざるなり。勝を見て起ち、勝を見ずして止む。^⑥ 故に計必ず先に定まり、然る後に兵は以て起つ可し。計未だ定まらずして兵の起つ者は、兵自ら怠る者なり。^⑦ 857……

(1) 簡文冒頭から857簡「兵自怠者也」までは参患の一部と類似する。「主所以卑尊貴賤、国所以存亡安危

者、莫鑿於兵」を参患は「君之所以卑尊、国之所以安危者、莫要於兵」に作る。

「鑿」について『説文』金部は「鑿、木を穿つ所以なり」とする。君主や国家の状態を「卑」・「尊」や「安」・「危」に到達させる道具の比喩として、「ノミ」を用いているのだろう。

(2) 「故【□】誅暴乱、伐不道、必以兵、□□姦邪、閉塞奇施、必以刑」を参患は「故誅暴国必以兵、禁辟民必以刑」に作る。

「奇施」について、原註は『淮南子』要略訓「接徑直施」の注「施、褒」を引き、「奇施」は「奇邪」の意味に近いものとする。従うべきだろう。

(3) 「然則兵者古所以外誅乱、内禁邪」を参患は「然則兵者、外以誅暴、内以禁邪」に作る。

(4) 「故兵者、尊主安国之主……」を参患は「故兵者、尊主安国之経也」に作る。

原註は簡文の「主」が「至(経)」の誤字である可能性を指摘する。原文のままでは上の「主」が君主、下の「主」が「かなめ」の意味で使われていることになる。同一文中で二つの「主」字が異なる意味で使われること

には、確かに違和感がある。とはいえ、本篇862簡から863簡にかけての「精材」も連続する文章の中で二度にわたって使われており、王兵篇の特徴といえるかもしれない。ここでは、原文のままで理解しておく。

(5) 参患では「故兵者、尊主安国之経也」以下「不可廢也。若夫世主則不然。外不以兵而欲誅暴、則地必虧矣。内不以刑而欲禁邪、則国必乱矣」と続き、簡文の「……地必損而国必危矣。内不用……」に類似する部分が含まれる。原註は参患の「不可廢也。若夫世主則不然」の十一字が簡文では本来無かった可能性を指摘する。図版・模本からすれば、854簡の「地必損」は簡の上端にあたり、853簡の「尊主安国之主」以下の断裂部分は十字程度しかないため、そのように判断したのでろう。

「地必損而国必危矣」の「地」が国土、「国」が国家であることはいうまでもないが、ここでの「地」と対になる「国」とは、直接には国都を指すものかもしれない。市法篇882簡「国市之法、外宫方四百步、内宫再之」の「国市」も国都の市を指すのだらう。ならば「国」と対比される「地」とは国都或いはその近郊を除く、領内の土地・聚落すべてを指す可能性が高い。王兵篇と参患

のこの部分を対比すれば、王兵篇では「外」に「地」と「国」の双方が対応するが、参患では「外」には「地」のみが、「内」には「国」のみが対応することになり、参患の方がより「国」と「地」を切り離す傾向が強いといえよう。こうした傾向は、866簡「故可以有地君国」を選陳では「然後可以有国」に作り、「地」の部分が抜けていることにも共通する。「国」については、漢の高祖劉邦の諱「邦」を避けて「国」に作っている可能性もあり、守法守令等十三篇や「管子」全体の「国」概念のなかで論ずべき問題かもしれない。こうした「国」や「地」の問題は下文865簡「絶地之民」・「侍固之国」の理解にも関係してくる。

(6) 参患では「国必乱矣」以下「故凡用兵之計、三驚当一至、三至当一軍、三軍当一戰」に作り、簡文の「……壹至、参至当壹戰」に類似する。参患と対比した場合、簡文では少なくとも「軍」に関する叙述が欠けていることになるが、詳細は不明である。参患の下文からすれば、戦闘にかかる費用が莫大であることを述べているものかもしれない。

(7) 参患は「三軍当一戰」以下「故一期之師、十年之

蓄積殫、一戦之費、累代之功尽。今交刃接兵而后利之、則戦之自勝者也」に作る。簡文の「故□□□□□……勝者」の部分もこれに類似するものかもしれない。

(8)「攻城圉邑、主人渴尽、易子而食之……」に相当する、参患の「則戦之自勝者也」以下は「攻城圉邑、主人易子而食之、析骸而爨之、則攻之自拔者也」となる。

図版・模本では「渴」字の左旁は読み取れないが、原註によれば銀雀山出土簡では多くの場合「渴」字を「竭」として用いるため「渴」字としたという。兵令篇984簡の「国内空虚尽渴」などが、「渴」を「竭」として用いる例だろう。

(9)「……非以圉也。見勝而起、不見勝而止」に相当する参患の「則攻之自拔者也」以下は、「是以聖人小征而大匡、不失天時、不空地利、用日維夢、其数不出於計。故計必先定……」に作る。原註は参患のこの部分が簡文とかなり異なり、『尉繚子』兵談「兵は起つに忿を以てす可きに非ざるなり。勝を見れば則ち興ち、勝を見ざれば則ち止む」の方が簡文に近いとし、また、簡文の「圉」字が「怨」の音近の誤字である可能性を指摘する。

「圉」について、『説文』口部に「圉、畜を養うの閑なり」

とある。牛馬の囲いの類である。『管子』幼官(以下、幼官)に「強国為圉、弱国為属」の語がみえ、その注は「強国は弱国を禁禦する所以、弱国は圉然たるなり」とし、『管子』集校は「猪飼彦博云う、圉は当に眷に作るべし。強弱皆な服従するをいうなり」とする。さらに後述するように、選陳などにみえる友好国を意味する「権与」の「権」について、章炳麟は「圉・権」・「圉」が通用し、いずれも「群」の意味で用いられることを指摘する。これらからすれば「圉」とは諸侯の服属関係をいう語のようであり、勢力圉といったところだろう。これらの「圉」の解釈からすれば、「非以圉也」とは865簡「伐国破邑、不待権……」と同じく、戦争において他国の力を頼りにしないことをいうものである可能性がある。

(10)「故計必先定、然后兵可以起。計未定而兵起者、兵自怠者也……」を参患は「故計必先定、而兵出於竟。計未定而兵出於竟、則戦之自敗、攻之自毀者也」に作る。選陳にも類似する箇所があり、「故凡攻伐之為道也、計必先定於内、然後兵出乎境。計未定于内、而兵出乎境、是則戦之自勝、攻之自毀也」に作る。

(訳文) 君主の地位の軽重を左右し、国家の安危存亡を左右する要素としては兵が最も緊要である。それ故に暴虐な国に制裁を加え、道理を弁えない国を討伐するには必ず兵を用い、悪人を……し、道に外れた行為を封じ込めるには必ず刑を用いるのである。これからすれば兵とは、国外では平和を乱す国に制裁を加え、国内では邪惡な行為を禁ずるためのものであること、言を待たない。それ故に、兵とは君主の地位を高め国家を安定させる要なのである。……国土が削られ国家存続の危機に陥る。国内で……(軍が)一度進駐し、三度進駐することは一度の交戦に相当する。それ故、……勝者。城壁を攻撃し邑を包囲し、防御する側ではそれぞれの子どもを取り替えて食らい……非以圍也。己の勝利を見定めて挙兵し、勝利を見定めることができなければ挙兵しない。それ故に必ず勝利の計略が定まってから挙兵すべきである。計略が定まらないままに挙兵すれば、その兵卒から自ずから緊張感が抜けていくのである。

是故張軍有不能戰、圍邑有不能拔、得地有不能仁(初)。参(三)者見一焉、則可破取也。故不明適(敵) 国之制858者不可

伐也。不知其蓄積不能約、不明其士卒弗先戰(陳)、不審其將不可軍。夫以治擊乱、以富擊859貧、以能擊不能、以教士擊毆民。此十戰十勝、百戰百勝之道。故号令行、卒□幟(陳)、則士知勝矣。所860喜(喜)之國能蜀(独) 利之、所亞(惡)之國能蜀(独) 害之。令行【□□□】□百、則天下畏之。位唯(雖) □而權多、則天861下懷之。必罰有罪而賞功、則天下從之。□【□】□□取天下精材、論百工利器、収天下豪桀(傑)、有862天下俊雄、春秋穀(角) 試、以闡(練) 精材。動如雷神、起如蜚(飛) 鳥、往如風雨、莫当其前、莫害其後、独出独863入、莫能禁止。有風雨之疾則不難遠道、有蜚(飛) 鳥之起則至(輕) 犯山河、有雷神之戰則能独制而毋適(敵)。不864莫(難) 遠道、故禽(擒) 絶地之民、至(輕) 犯山河、故能制侍(侍) 固国、独行而毋適(敵)、故令行天下。伐国破邑、不侍(待) 權865……□天下莫之能害、故可以有地君国。出号令、明法制866……

是の故に軍を張りて戦う能わざる有り、邑を囲みて抜く能わざる有り、地を得て仁(初) 1 所能わざる有り。参(三) 者に一を見れば、則ち破取す可きなり。故に適(敵) 国の制に明らかならざれば858伐つ可からざるなり。其の蓄積を知らざれば約す能わず、其の士卒に明らかならざれば先に戦

(陳)せず、其の將を審にせざれば軍す可からず。² 夫れ治を以て乱を撃ち、富を以て貧を撃ち859、能を以て不能を撃ち、教士を以て敵民を撃つ。此れ十戰十勝、百戰百勝の道。³ 故に号令行われ、卒□幟(陳)すれば、則ち士は勝を知る。⁴ 憲(喜)む所の国は860能く蜀(独)り之を利し、巫(惡)む所の国は能く蜀(独)り之を害す。令行【□□□】□百なれば則ち天下之を畏れ、位は□と唯(雖)も而れども権多ければ則ち天下之に懷き861、必ず有罪を罰して功を賞すれば則ち天下之に従う。⁵ □【□】□□、天下の精材を取り、百工の利器を論じ、天下の豪桀(傑)を収め、天下の俊雄を有し862、春秋に穀(角)試し、以て精材を闡(練)る。⁷ 動くこと雷神の如く、起つこと蜚(飛)鳥の如く、往くこと風雨の如く、其の前に当る莫く、其の後を害する莫く、独り出で独り863入り、禁止する能う莫し。⁸ 風雨の疾有らば則ち遠道を難しとせず、蜚(飛)鳥の起有らば則ち空(輕)く山河を犯し、雷神の戦有らば則ち能く独り制して適(敵)する母し。⁹ 遠道を莫(難)しとせざるが864故に絶地の民を禽(擒)え、空(輕)く山河を犯すが故に能く固を待(恃)むの国を制し、独行して適(敵)する母きが故に令は天下に行わる。¹⁰ 国を伐ち邑を破るに、権……を待(待)たず865

……□天下に之を害す能う莫し、故に以て地を有^たち国に君たる可し。号令を出し、法制を明らかにし866……¹¹

(1)「是故張軍有不能戰」以下860簡の「百戰百勝之道」までは選陳の一部と類似する。王兵の、選陳と類似する部分は、これ以外に864簡「有雷神之戰則能独制而母適」以下、869簡「察知天下、□御機數」のあたりまで続くが、簡文の記述の順序が、選陳の記述の順序と一致するわけではない。原註の言を借りれば、「選陳はその内容によつて三段に分けることができる。『若夫曲制時拳』から『十戰十勝百戰百勝』までが前段、『故事無備、兵無主、則不蚤知』から『兵主之事也』までが中段、『故有風雨之行』から篇末までが後段である。この三段の文章はすべて王兵篇の簡文にみられるが、そこでは後段と中段の順序が入れ替わっている」ということになる。

選陳の冒頭部から、簡文「是故張軍有不能戰、圉邑有不能拔、得地有不能仁。參者見一焉、則可破取也」に相当する部分までを引用すると「若夫曲制時拳、不失天時、母曠地利、其數多少、其要必出於計數。故凡攻伐之為道也、計必先定于内、然後兵出乎境。計未定於内、而兵出

「平境、是則戰之自勝、攻之自毀也。是故張軍而不能戰、圉邑而不能攻、得地而不能笑、三者見一焉、則可破毀也」ということになる。原註によれば、選陳「是故張軍而不能戰」に先立つ「計未定於内、而兵出乎境、是則戰之自勝、攻之自毀也」が857簡「計未定而兵起者、兵自怠者也」に類似するため、857簡と858簡が隣り合うものであると考えたという。

「是故張軍有不能戰」の「張」字について、『珍稀』は『左伝』桓公六年「我、吾が三軍を張る」の注として「自ら修大するなり」を引く。しかし、『左伝』のこの注は直接には「張吾三軍」にかかるものではなく、簡文の「張軍」の解釈としては適切ではない。簡文の「張軍」とは軍を展開させるという程度の意味だろう。『孫臏兵法』威王問278簡に「田忌、孫子に問いて曰く、軍を張りて戦う母きに道有りや、と。孫子曰く、有り。險に倅^{あつま}りて壘を増（増）し……」とある。すなわち敵地などに進軍して土壘を築いて駐屯している状態を「張軍」というのであり、下文の「軍」と同じ意味と考えられる。

「得地有不能仁」の「仁」について、原註は「仞」字の仮借とし、充滿の意味とする。『説文』牛部に「仞、

満なり」、王法篇898簡に「凡欲富国猥草仁邑」とあり、従うべきだろう。898簡の「猥草仁邑」からすれば、「仁」は邑を民で充たす意味になる。簡文の「地」とは、「圉邑有不能拔」の「邑」を含む国土一般を指すのだろう。獲得した土地を人で充たす方法は、旧住民の慰撫と入植の二種類が考えられるが、極端な場合は完全な住民入れ換えも想定される。「得地有不能仁」とは慰撫や入植の失敗を指すのだろう。

(2)「故不明適国之制者不可伐也。不知其蓄積不能約、不明其士卒弗先戦、不審其将不可軍」を選陳は「故不明于敵人之政不能加也、不明于敵人之情不可約也、不明于敵人之将不先軍也、不明于敵人之士不先陣也」に作り、下二句の順序が入れ替わる。『通典』卷一五〇に引く「管子」は、各句の「于」字、下二句の結びの「也」字が無く、「敵人之政」を「敵人之攻」に、「敵人之情」を「敵人之積」に、「不可約也」を「不能約也」に作る。原註は『通典』引『管子』が「于」字を用いず、また「敵人之積・「不能約也」に作る点で簡文により近いこと、今本『管子』の「情」字が「積」の誤字である可能性を指摘する。とはいえ、先に述べたように『通典』引『管子』は二句二

句の構成をとり、簡文は初句と下三句の構成をとるように、両者の差異も大きい。

「不知其蓄積不能約」の「約」字について、図版・模本では糸偏の上端しか確認できないが、原註によれば選陳により暫定的に「約」字とみなしたという。以下、この字を「約」字と仮定して話を進める。選陳の注は「約」を自軍の士卒との約誓とみなすが、『珍稀』はこれを採用らず、『楚辭』招魂「土伯九約」の王逸注「屈也」を引き、敵を屈服させることとみるようである。しかし「約」と併記される「𢇛」・「軍」が自軍を指すからには、「約」も自軍を指す可能性が高い。やはり自軍での約誓である可能性は否定できない。

また「不審其将不可軍」の「軍」字について、『珍稀』は『広雅』釈言「軍、圉也」を引くが、文脈上問題がある。この部分は初句と下三句が総論と各論に相当すると考えられるが、下三句の「蓄積」・「士卒」・「将」が下から上へという方向性をもつことからすれば、それに対応する「約」・「𢇛」・「軍」の各句も何らかの方向性をもっているとみるべきだろう。「不能約」・「弗先𢇛」・「不可軍」は戦争の手順のなかで理解できるように思われる。

『左伝』成公十六年に、晋・楚の戦闘直前の様子を述べて、「楚、晨に晋軍を圧して陳」したが、これに対して晋側では「井を塞ぎ竈を夷げ、軍中に陳」したという。この場合の「軍」は宿营地、「陳」は戦闘陣形である。通常は「軍」を出て「陳」するが、楚軍が晋の「軍」に接近して「陳」したため、晋軍は「軍中に陳」したのである。また、このとき、楚の陣営に鄭・蛮の軍も加わっていたが、「鄭は陳して整わず、蛮は軍して陳せず」という状態だった。蛮は軍団として固まっではいるものの、戦闘陣形をとっていない、という意味だろう。これらからすれば、戦争においては挙兵して宿营地などで軍団として固まる「軍」の段階から、さらに戦闘陣形である「陳」へ、という流れがあったといえる。

また、このとき楚王と晋からの亡命者である伯州犁とが、晋軍を望見しながら対話するというかたちで晋軍の動きが述べられる。それによれば、晋軍は戦闘へ至る過程で「合謀」・「虔卜於先君」・「塞井夷竈而為行」・「聽誓」・「戰禱」という手順を踏んだようである。「為行」は先の「陳」に相当する。続く「聽誓」の場面では楚王が「戦ならんか」と問い、伯州犁は「未だ知る可からざるなり」

と答えている。これからすれば「陳」後の「誓」は和戦の最終決定を全軍に通達するという意味があつたようである。この場合は続く「戰搏」によつて方針が開戦に決定したことが示されるが、『孫子』行軍に「輕車先に出で、其の側に居る者は陳なり。約無くして和を請う者は謀なり。奔走して兵車を陳する者は期なり」という「約」は、「陳」後において、士卒に和平を「約」する場合を意識したものだろう。自軍の士卒に「約」したうえで、敵に和平を請う場合は「謀」ではないことになる。戦国秦漢における將軍の「約」が、軍法同様の意味合いをもつものだったことは、増淵龍夫「戦国秦漢時代における集團の『約』について」（初出一九五五。同氏『新版 中国古代の社会と国家』岩波書店、一九九六所収）や大庭脩「前漢の將軍」（初出一九六八。同氏『秦漢法制史の研究』創文社、一九八二所収）の指摘するところである。將軍の「約」は「陳」後においてのみ発せられたわけではないが、和戦の決定が「約」として通達されれば、それが覆ることはやはり得なかつたことだろう。簡文では「約」と「蓄積」が結びつけられるが、備蓄食糧の多寡はその士気の高さと持続力を示す。最終方針を士卒に通

能撃不能」を「将」に、「以教卒練士撃敵衆白徒」を「士」に対応させていることになる。これに対し簡文では、位置的に「以治撃乱」には上文の「制」、「以富撃貧」には「蓄積」、「以能撃不能」には「士卒」、「以教士撃敵民」には「将」が対応することになり、「以富撃貧」と「蓄積」以外ほとんど噛み合わない。上文の「士（卒）」と「将」の順序が簡文と選陳で入れ替わっている原因は、上文とこの部分との関連づけの違いによるのだろう。

以下、選陳は「故事無備、兵無主、則不蚤知、野不辟、地無吏、則無蓄積……」と続き、内容的には867簡以下と類似する。

(4)「故号令行」から864簡「莫能禁止」までは七法の為兵之数の後半と類似する。為兵之数の、簡文「故号令行、卒□幟、則士知勝矣」に相当する部分までを引用すれば「……故明於機数者、用兵之勢也。大者、時也。小者、計也。王道非廢也、而天下莫敢窺者、王者之正也。衡庫者、天子之礼也。是故器成卒選、則士知勝矣」ということになる。

図版・模本では簡文の「卒」下の一字は「イ」偏らしきものを確認できるが、原註はこれが「徒」字である可

能性を指摘する。

「士」は859簡「士卒」のように「卒」と一括りにされることもあるが、細かくいえば「卒」より上級の下士官クラスを含む精銳・熟練兵を指すと考えられる。先の「以教士撃敵民」や869簡「譟勇士」の「士」もこうしたものだろう。

(5) 為兵之数は「則士知勝矣」以下を「偏知天下、審御機数、則独行而無敵矣。所愛之国而独利之、所惡之国而独害之」に作り、簡文「所喜之国能蜀利之、所重之国能蜀害之」に類似する。原註は為兵之数の「而」字を簡文によって「能」と解すべきことを指摘する。

なお、図版・模本では「蜀利之所重之」の部分の左側が殘欠して確認できないが、テキストに従っておく。

「蜀(独)」は下文「独出独入莫能禁止」、「能独制而毋適」、「独行而毋適」、「先見適」【蜀行】の用例からすれば、「その行為を妨げる者なく自由に」といった意味での「独り」なのだろう。

(6) 簡文「令行【□□□□】□百、則天下畏之。位唯□而權多、則天下懷之。必罰有罪而賞功、則天下從之」に相当する「独害之」以下の部分を、為兵之数は「則令行

禁止、是以聖王貴之。勝一而服百、則天下畏之矣。立少而觀多、則天下懷之矣。罰有罪賞有功、則天下從之矣」に作る。861簡は断裂しており、上端に連なる「令行」までの部分と、下端に連なる「□百」以下の部分からなり、その間に入る文字は三字程度しかない。このことから原註は、簡文では「是以聖王貴之」の句は無かったはずであり、それ以外の句の字数もやや少なめだったとみる。原註は、また、為兵之数では「則令行禁止」の五字は上句に属すものの、簡文の「令行」二字は下句に属する可能性を指摘する。この部分は「……則天下……」の形式が繰り返され、「則」の前の条件節は下二句では「位唯□而權多」・「必罰有罪而賞功」であり、やはり字数的に「令行」以下が条件節であると判断されるため、原註に従うべきだろう。

この部分は、「令行【□□□】□百則天下畏之」が、直前の「所亜之國能蜀害之」を、続く「位唯□而權多則天下懷之」が「所懲之國能蜀利之」を受け、「必罰有罪而賞功、則天下從之」で結ぶ構成であると思われる。欠字の判断は難しいが、地図によれば「令行禁止而服百」・「位唯少而權多」といったところかもしれない。

「位唯□而權多則天下懷之」の「權」字は図版・模本では木偏程度しか確認できないが、原註は為兵之数「立少而觀多」の「觀」字を簡文によつて「權」と読むべきであるとすると。とりあえずテキストに従つて「權」としておく。「天下懷之」からすれば「位唯□而權多」は何かの徳の類を述べているようであり、權威・權力や權謀を意味する「權」につながりにくいものを感じる。王兵篇で注目される「權」字は865簡の「伐國破邑不待權」であるが、その部分の原註は選陳・幼官「不待（待）權与」によつて、友好国を意味する「權与」とみるようである。「權多」の「權」も友好国を意味するならば「天下懷之」につながりやすい。『管子』事語（以下、事語）に、佚田が斉桓公に対して「何ぞ諸侯の權に因りて以て天下を制せざるや」と献策し、管子が「……故に發すと風雨の如く、動くこと雷霆の如く、独り出で独り入り、之を能く禁止する莫く、權与を待たず。故に佚田の言は非なり」と、これを否定したことがみえる。『管子集校』に引く王紹蘭の説では「因諸侯權以」を「因諸侯權与」と解するが、他の箇所でも「某某の權与」の用例はみられず、「諸侯權」で一語としておくべきだろう。だとすれば、

齊が「因」ることのできる「諸侯權」が「權与」と言い換えられていることになる。簡文の「權多」の「權」も味方となる諸侯の權力を意味する可能性があるが、断定はできない。

「權」と対比される「位」については、「位唯（雖）□□」というからには「位」が「□」の逆であることが天下を懷かせる最善の手法であり、「權多」が次善ということになる。『説文』人部に「位、中庭の左右に列す、之を位と謂う」というように、「位」は朝廷における位次を意味する。この「位」が君主の地位であれば、本篇冒頭「主所以卑尊貴賤」より「□」は「卑賤」の類の語ということになるが、君主の地位が低くても天下が懷くというのは本篇の趣旨にそぐわない。872簡から873簡にかけての「群臣・大吏・左右及父兄」からすれば、臣下などの地位を指す可能性があるが、詳細は不明とせざるを得ない。

(7) □□ □□ □□ 取天下精材、論百工利器、収天下豪桀、有天下俊雄、春秋穀試、以闡精材」に相当する部分を為兵之数は「故聚天下之精財、論百工之銳器、春秋角試、以練精銳為右。成器不課不用、不試不臧。収天下之

豪傑、有天下之駿雄」に作る。類似の文章は『管子』の幼官や小問などの篇にもあり、それぞれ「求天下之精材、論百工之銳器、器成角試否臧。収天下之豪傑、有天下之精材」・「公曰、請問戰勝之器。管子対曰、選天下之豪傑、致天下之精材、来天下之良工、則有戰勝之器矣」に作る。原註は幼官の「器成角試否臧」が本来「器成角試、不試不臧」であった可能性を指摘し、また「精材」に作る点で簡文と一致するという。

「穀試」の語は、庫法篇834簡にも「諸庫器善否美惡及穀試」と用いられている。原註の指摘するように「穀」・「角」は通用し、「角」・「試」は「きそう」・「ためす」の意味である。『管子』の「角試」が物のみを受け、庫法篇の「穀試」が、続く文章が明らかでないにせよ、「諸庫器」を受けていることからすれば、この「穀試」も器物の試験である可能性もある。しかし、戈や矛などの柄の試験方法が『周礼』考工記・廬人にみえるが、その内容、しなり具合や強度を確認するといったものに過ぎない。こうした試験が「春秋」といった季節単位で行われ、「天下豪桀」・「天下俊雄」がそこに関与していたとは考えがたい。一方で「穀試」が「豪桀」・「俊雄」のみ

を受ける人間の試験だと捉えることも、「精材」・「利器」の語や庫法篇の記載から躊躇せざるを得ない。思うに「穀試」とは軍事演習の類の、実戦的な試験を指すのではなからうか。

簡文及び為兵之数が「春秋」という季節をあげていることは、蒐・苗・獮・狩といった、周において季節ごとに行われたとされる田獵兼軍事演習を想起させる。『左伝』隱公五年では、これらを列挙した後「……三年にして兵を治め、入りて振旅し、帰りて飲至し、以て軍実を数え……」と続け、注は「廟に飲し、以て車徒・器械及び獲る所を数うなり」とする。この注からすれば、これらの軍事演習においては人・器双方が検閲の対象となつたようである。軍事演習において武器が重視されることに何の不思議もない。

『漢書』刑法志は、こうした軍事演習が戦国時代になつて「稍や講武の礼を増し、以て戲樂と為し、用て相い夸視す。而して秦は角抵と更名し、先王の礼は淫樂の中に没」してしまつたという。同武帝紀・元封三年の条に「角抵の戲を作す。三百里内皆な觀たり」とあり、この「角」字について応劭は「技を角うなり」、文類は「両

相い当りて力を角い、技芸射御を角う」と注する。「穀試」の「穀」は「角抵」の「角」と同じ意味だろう。また、応劭らが「角」の対象とした「技」に関して、刑法志は「齊愍は技撃を以て疆たり」といい、孟康注は藝文志・兵技巧家の文章により「兵家の技巧なり。技巧とは手足を習い、器械を便とし、機關を積み、以て攻守の勝を立つなり」とする。「技」において器械も重視されたことは、「角抵」でも器物がチェックされたであろうことを示唆する。

下つて前漢では年に一度、秋に各郡国で「都試」なる軍事演習が行われた。たとえば『漢書』韓延寿伝に、彼の地方官としての姿勢を述べて「都試講武に及びては、斧鉞旌旗を設けて射御の事を習う」とあり、また彼が東郡太守であつたとき「官の銅物を取り、月蝕を候いて刀劍鉤鐔を鑄作し、尚方の事に放効」したという。彼がわざわざ「月蝕を候」って武器を鑄造したのは、都試において郡將たる威儀を整えるためだろう。漢の都試においても、器物はおろそかにはできなかったに違いない。古の軍事演習の系譜をひく「角抵」と「都試」の語からすれば、簡文の「穀試」も同類とみるべきだろう。

「穀試」を人・器双方を対象とした軍事演習と捉える

ならば、簡文の「精材」の内容が問題となる。「取天下精材」の「精材」は「論百利器」と並べられることから武具の素材を指している可能性が高いが、下の「以闡精材」の「精材」は主に人材を指しているとみた方が落ち着きがよい。853簡「故兵者、尊主安国之主」では「主」字が一方では君主、一方では「かなめ」として同一文中に用いられているように、同じ語を含意を変えながら用いるのは、王兵篇の癖のようなものかもしれない。

また、「穀試」が「春秋」とされる点については、「春秋」で四時を代表させているとみることも不可能ではない。しかし田獵兼軍事演習について、『管子』小匡は「春に以て田すを蒐と曰い、旅を振う。秋に以て田すを獮と曰い、兵を治む」と、春と秋のみをあげる。王兵篇と『管子』が緊密な関係にあることからすれば、文字通り春と秋と解すべきだろう。

(8)「動如雷神、起如蜚鳥、往如風雨、莫当其前、莫害其後、独出独入、莫能禁止」を為兵之数は「故拳之如飛鳥、動之如雷電、発之如風雨、莫当其前、莫害其後、独出独入、莫敢禁圍」に作る。為兵之数は以下「成功立事必順於理義、故不理不勝天下、不義不勝人。故賢知之君必立於勝

地、故正天下而莫之敢御也」と続き、簡文とは一致しない。註(7)に引いた幼官では「収天下之豪傑、有天下之称材」以下、「説行若風雨、発若雷電」と続き、「莫当其前」以下の文章はない。これに類似する文章は『管子』の事語や輕重甲にもみえ、それぞれ「故発如風雨、動如雷霆、独出独入、莫之能禁止、不待権与」・「発如雷霆、動如風雨、独出独入、莫之能圍」に作る。

「動」は『孫臏兵法』八陳339簡「皆侍(待)令而動」のように戦闘における動きを指し、雷撃の破壊力を比喻として用いているのだろう。

「雷神」について、原註は「神」・「電」二字が「申」声に従うことから、「雷電」の意味である可能性を指摘する。『古文字詁林』一(上海教育出版社、一九九九)神字の条にこの簡所の原註をも引きながら「申」・「神」・「電」が古くは同義であったとする諸説が列挙される。とはいえ、ここで「神」字が「かみ」として用いられている可能性も否定できないが、その場合でも『五經異義』に鄭玄の言として「今人亦た雷を謂いて雷公と曰い、天を天公と曰う」(『礼記』郊特牲孔穎達疏引)とあるように、雷そのものを「雷神」に擬えていることになる。

「起如蜚鳥」とは、下文「有蜚鳥之起則至犯山河」からすれば、拳兵の速やかなるたえではなく、地形の高下・險阻をものともしないという意味であり、ならば「往如風雨」は平地での行軍の速やかなるたえということになる。平地での行軍から、險阻を越え、戦鬪に突入する、という流れを逆にたどっている。先の「不知其蓄積不能約、不明其士卒弗先戰、不審其將不可軍」と同様、時系列を逆にたどり、緊迫度の高い事項を初句に置くという構成である。

(9)「有風雨之疾」以下、866簡「出号令、明法制」までは選陳の後半に類似の文章がみられる。「有風雨之疾則不難遠道、有蜚鳥之起則至犯山河、有雷神之戰則能独制而毋適」を選陳は「故有風雨之行、故能不遠道里矣、有飛鳥之舉、故能不險山河矣、有雷電之戰、故能独行而無敵矣」に作る。

図版・模本では「雷神之戰則能独制」の部分の左側が断裂しており、右側しか確認できない。各字はほぼ前後の文から推測できるものの、「戰」字は「戈」旁しか確認できず、前後に「戰」字はみられない。原註によれば選陳によって「戰」字とみなしたという。

「能独制而毋適」及び865簡「独行而毋適」の「母」字について、テキストは「母（無）」として「無」字とみなすが、市法篇879簡「……必大吏能平均、下吏能母制利焉」などからすれば、「母」字のままでよい。ここでの「適」は「敵」という名詞ではなく、「敵する」という動詞、「母適」とは敵が無いのではなく、抗う者がいないという意味だろう。

選陳は以下「有水旱之功、故能攻国救邑、有金城之守、故能定宗廟、育男女矣、有一体之治、故能出号令、明憲法矣。風雨之行者、速也。飛鳥之舉者、輕也。雷電之戰者、士不齊也。水旱之功者、野不收・耕不獲也。金城之守者、用貨財設耳目也。一体之治者、去奇說、禁雕俗也」とあり、その後に「不遠道里……」に接続する。

(10)「不莫遠道、故禽絶地之民、至犯山河、故能制侍固国、独行而毋適、故令行天下」を選陳は「不遠道里、故能威絶域之民、不險山河、故能服恃固之国、独行無敵、故令行而禁止」に作る。また註(8)に引いた『管子』の「輕重甲にも「故不遠道里而能威絶域之民、不險山川而能服有恃之国」とみえる。

「故禽絶地之民」の「禽」は兵令篇970簡「則敗軍

死将禽卒也」とみえ、捕虜することを意味する。「絶」とは『淮南子』脩務訓「絶国殊俗」注「絶は遠」というように「遠」と同義だが、『説文』糸部「絶、断絲なり」からすれば、こちらの国境の遙か向こうの隔絶した地ということになる。こうした土地を飛び地的に領有するとは困難であるため、「禽絶地之民」という表現となっているのだろう。

「待固国」に関連して、『周礼』夏官・叙官・掌固の注に「固は国の依阻する所の者なり。国には固と曰い、野には險と曰う。易に曰く、王公は險を設けて以て其の国を守る」とある。これからすれば、「国」とは国都を指すようである。掌固の職に「……凡そ国・都の竟に溝・樹の固有り。郊も亦た之の如し。民に皆な職有り。若し山川有らば則ち之に因る」というが、この「山川」が簡文の「山河」にあたるのだろう。ならば先の「絶地之民」とは「待固国」の領内の民とみることができ、間に他国の領域が介在するなどして「待固国」の領土とこちらの領土とが接してはいないため、「絶地」という表現がとられているのかもしれない。

(11) 「伐国破邑、不待權……」の部分を選陳は「故攻国

救邑、不待權与之国」に作る。「權与」は註(6)で述べたように友好国を指すようである。『管子』の「權与」は先に引いた幼官・事語の他に軽重甲にもみられる。原註は簡文の「待」字について、幼官・事語によつて「待」と読むべきであるとする。

(12) 選陳は「不待權与之国」以下「故所指必聴、定宗廟、育男女、天下莫之能傷、然后可以有国。制法儀、出号令、莫不嚮応、然后可以治民一衆矣」に作る。簡文の「……□天下莫之能害、故可以有地君国。出号令、明法制……」はこうした文章の一部だろう。また兵法にもこれに近い文章があり、「定宗廟、遂男女、官四分、則可以定威徳。制法儀、出号令、然後可以一衆治民」に作る。

(訳文) このために軍を展開させても戦闘することができない者があり、邑を包囲しても陥落させることができない者があり、領土を獲得してもそこを民で充たすことができない者がある。この三者のうち一つでも目にしたならば、敵を破り己のものとすることができる。それ故に相手の国の制度を熟知していなければ討伐を加えてはいけない。相手の備蓄を把握していなければ(和戦の方

針を士卒と）約束することはできず、相手の士卒を熟知していなければこちらから戦闘陣形を組まず、相手の将帥を知り抜いているのでなければ出兵してはいけない。さて、治国を以て乱国を攻撃し、富国を以て貧国を攻撃し、能將を以て不能の將を攻撃し、精銳を以て烏合の衆を攻撃することが必勝の道である。それ故に命令が発せられ兵卒が戦陣に就けば（上級の）士卒は勝利を確信するのである。己の好む国には意のままに利益を与え、憎む国には意のままに損害を与える。命令が行われ……ならば天下はその国を畏怖し、（臣下の？）位が……でも、味方となる諸侯（？）が多ければ天下はその国を慕い、信賞必罰を徹底すれば天下はその国に従順となる。……天下の厳選された（武器の）素材を手に入れ、あらゆる優れた武器を検討し、天下の豪傑を収め、天下の俊英を有し、春と秋にはこれらを競わせて試し、それによって厳選された人材・器材を鍛えあげる。（戦場での）動きは雷のように（破壊力があり）、（陰阻をものともせず）越えてゆくこと飛鳥のように（軽々とし）、（平地での）行軍は疾風豪雨のように（速やかに）、それを遮る者なく、また追いついて後ろから攻撃する者もなく、自由に

出入りして阻む者はいない。疾風豪雨の速度があれば遙かな道もたやすく乗り越えられ、飛鳥の上昇があれば軽々と山河をものともせず、雷のような戦闘力があれば一方的に相手を制圧して抗う者はいない。遙かな道もたやすく乗り越えられるが故に隔絶した国土の民を捕虜とし、軽々と山河をものともしないが故に陰阻を頼みとする国都を制し、自由に行動して抗う者がいないが故に命令は天下に行き渡る。国を討伐し邑を包囲するのに友好国の手を借りる必要はない。……その国に危害を加えることができる者は天下におらず、それ故に国土を保有して国に君臨できる。命令を発し法制を明らかにし……

……无将、不蚤（早）知、野无吏、无蓄積、官府毋長、器械（械）867苦俛（竄）、朝廷无正、民幸生。先見適（敵）【□】蜀（独）行、有積委、久而不賣（置）、器械（械）備、功（攻）伐少費、賞罰□868、民不幸生、則賢臣權尽。是故將者、審地刑（形）、選材官、量蓄積、課勇士、察知天下、□御機數、而869圖陰阻（阻）。舟車之險・濡輪之水、山陵・林陸・丘虛・阻（阻）沢・蒲葦・平易（蕩）・尺（斥）魯（鹵）・津洳・涂淖・大畝・深基・經濟。下870沢、澌（測）水深淺、邑之小大、城……入相

錯者、乃可以行軍圉邑。举措起居、知先871後、毋失地便。王兵者必三具。主明、相文、將武。主事者、將出令起卒有日、定所欲功（攻）伐国、使群臣・大872吏・左右及父兄母敢議於成。主之任也。相国者、論功勞、行賞罰、不敢隱賢、使百官共（恭）敬悉畏、毋敢873□隨（惰）行□、以待（待）主令。大將者、□□874……

……將无ければ蚤（早）く知らず、野に吏无ければ蓄積无く、官府に長たる母ければ器械（械）は867苦俛（𡵓）たり、朝廷に正无ければ民は幸生す^①。先に適（敵）を見れば【□】蜀（独）行し、積委有らば久しうすれども責（置）しからず、器械（械）備れば、功（攻）伐に費少く、賞罰□なれば868民は幸生せず、則ち賢臣権尽さる^②。是の故に將たる者は、地刑（形）を審にし、材官を選び、蓄積を量り、勇士を誤え^③、天下を察知し、機數を□御し、而して869險阻（阻）を図る。舟車の險・濡輪の水、山陵・林陸・丘虚・阻（阻）・沢・蒲葦・平蕩（蕩）・尺（斥）魯（鹵）・津洳・涂淖・大畝・深基・経溝あり。下870沢なれば水の深淺を滅（測）り、邑の小大、城……入相錯者、乃ち以て軍を行い邑を圉む可し。举措起居に先871後を知り、地の便を失う母し^④。王兵たる者は必ず三つ具わる。主明、相文、將武なり^⑤。主の事とは、將の令を

出し卒を起すに日有らしめ、功（攻）伐せんと欲する所の国を定め、群臣・大872吏・左右及び父兄をして敢て成に議あること母からしむ。主の任なり^⑥。相国たる者は、功勞を論じ、賞罰を行い、敢て賢を隱さず、百官をして共（恭）敬悉畏し、敢て873□隨（惰）行□すること母く、以て主の令を待（待）たしむ^⑦。大將たる者は、□□874……

（一）ここから869簡の「賢臣権尽」までは兵法と選陳の中段に類似する。簡文「……无將、不蚤知、野无吏、无蓄積、官府毋長、器械苦俛、朝廷无正、民幸生」を選陳は「故事無備、兵無主則不蚤知、野不辟・地無吏則无蓄積、官無常・下怨上、而器械不功、朝無政則賞罰不明、賞罰不明則民幸生」に作り、兵法は「兵無主則不蚤知敵、野无吏則无蓄積、官無常則下怨上、器械不巧則朝無定、賞罰不明則民輕其產」に作る。兵法のこの部分は、866簡「出号令、明法制」に類似する「制法儀、出号令、然後可以一衆治民」に続く。原註によれば866簡と867簡を連続するものとみなしたのは、このことに基づくという。

「野无吏、无蓄積」の「野」は、「蓄積」の語からすれ

ば邑外の田野と解されるが、下文の「官府」・「朝廷」との対比から、国都の外側の地方一般をも含むとみるべきかもしれない。たとえば『周礼』地官・県師「歳時を以て野の賦貢を徴す」注「野は甸・稍・県・都を謂うなり」、孫詒讓『正義』に「是れ遠郊以外、王城を距つること二百里の甸より五百里の都に至るまで、通じて野もて称すを得るなり」という。下文の「先見適」【□】「蜀行」からすれば、「……无将、不蚤知」は敵地でのことを指し、「朝廷无正」は無論宮城の内部のことであり、外から内へという記載の順序をとるようである。だとすれば、中間の「野无吏」とは国境の内、国都の外、「官府毋長」とは国都の内、宮城の外ということになる。「将」や器械を収める官府の「長」、朝廷の「正」に並べるには、邑外の田野のみを管轄する官吏よりも、郡守・県令といった地方官を含むとみるべきだろう。田野を管轄する官吏については『管子』小匡に管仲の言として「草を墾き邑に入れ、土を辟き粟を聚め、衆を多くし地の利を尽くすに、臣は甯戚に如かず、請らくは立てて大司田と為さん」とある。「墾草入邑」は王法篇898簡「狼草仁邑」と同じく開墾して邑を人で充たすといった意味だろう。中央の田野

を管轄する官が地方の邑にも関与することが窺える。

なお「无将」・「无吏」・「毋長」・「无正」の「无」・「母」とは不存在ではなく、人材を得ないというほどの意味だろう。「長」にのみ「母」字が使用されているのは、「長」が名詞ではなく、動詞として「長たる」の意味で用いられているためと考えられる。864簡「独制而母適」の「母適」と同様である。

「官府毋長、器械苦佚」の「苦佚」について、原註は「苦廬」と解し選陳の「不功」と同様精緻ではないという意味ととるべきだとし、『荀子』議兵「械用兵革の攻完便利なる者は強く、械用兵革の廬楛不便利なる者は弱し」を引き、「攻完」の「攻」は「功」、「廬楛」は「苦廬」と同義とする。異存はない。

「器械」に関連する官署としては、第一に庫法篇の「庫」をあげることができるが、「官府」とするのは、「官府」一般が本来的に器物を管理する場だったからだろう。『国語』齊語に「公曰く、士農工商を処くに若何、と。管子対えて曰く、昔、聖王の士を処くや間燕に就かしめ、工を処くに官府に就かしめ、商を処くに市井に就かしめ、農を処くに田野に就かしむ。……」とあり、『管子』の

小匡にも同様の記述がみられる。古くは「官府」は工人の居住地とされたようであり、工人の製造する器物と「官府」の関係の深さが窺えよう。また、守法守令篇810簡から811簡にかけて「諸官府室屋壮垣及家人室屋器械」を城郭守備のために徵発することが述べられる。前稿で指摘したように「諸官府室屋」と「家人室屋」とで徵発対象が異なるのは「官府」が本来的に器械を管理する場であることによるのだろう。

「朝廷无正、民幸生」に関連して、原註は選陳の「朝廷無政」兵法の「朝廷無定」の「政・定」字について、いずれも簡文によって「正長」の「正」字と解すべきだとする。特に異存はないが、『左伝』閔公二年に「夫れ師を帥い、専らに謀を行い、軍旅に誓うは君と国政の図る所なり」とあり、注が「国政は正卿なり」とするように、「正・政」は通用する。簡文の「正」も国政を総べる者であり、具体的には872簡の「相」を指すと考えられる。「民幸生」は下文の「民不幸生」の逆。「民不幸生」とは戦争に即していえば兵令篇968簡「……然り而して適（敵）を見て之に走ること帰るが如く……」命を惜しまないことだろう。民が命を惜しみ、己の役割に身を

投げ出そうとしないことを「民幸生」というものと思われる。

(2)「先見適」蜀行、有積委、久而不賣、器械備、功伐少費、賞罰、民不幸生、則賢臣權尽」を選陳は「故蚤知敵人如独行、有著積則久而不置、器械功則伐而不費、賞罰明則人不幸、人不幸則勇士勸之」に、兵法は「故曰、早知敵而独行、有著積則久而不置、器械巧則伐而不費、賞罰明則勇士勸也」に作る。

「賢臣權尽」の「權」字について、原註は選陳・兵法によって「勸」と読むべきかもしれないとする。しかし、「權」と読んでも意味が通じないわけではない。『孫臏兵法』行纂372簡に「孫子曰、用兵移民之道、權衡也。權衡、所以纂賢取良也」とあり、「權衡」を、「賢」者・「良」者を推し量る秤の意味で用いる。また、竹簡『六韜』第一篇639簡に「以祿取人、人可渴」とあり、「渴」・「尽」がほぼ同様の意味で用いられたことは本篇856簡「主人渴尽」から窺える。すなわち「賢臣權尽」は「群臣のなかから、遺漏なく賢臣が選り分けられる」という解釈が可能である。或いは「孫臏兵法」威王問274簡「夫れ權とは、衆を聚むる所以なり」からすれば、「權」は「あ

つめる」という方向の意味をもつ可能性もある。しかし、行纂では「権」と「賢」とを関連づけているため、それに従って「はかる」と解しておきたい。或いは「賢臣の権謀術数が巧緻を極める」という解釈もできなくはないが、後述するように、この部分に先立つ「民不幸生」は人材登用と親和性があるため、採用しない。

この部分の各句は、上文の「……不蚤知」・「……无蓄積」・「……器械苦使」という各句の結果を受け、それぞれ「先見適……」・「有積委……」・「器械備……」と字句を変えながら論を展開させるが、最後の「朝廷无正、民幸生」に対応する部分のみが、「民不幸生……」ではなく「賞罰□、民不幸生、則賢臣権尽」と「朝廷无正、民幸生」を説明しながら「則」字で結果につなげる。「民不幸生」については、『管子』君臣上に「労を以て禄を授くれば則ち民は幸生せず」、同君臣下に「其の賢を選び材を遂ぐるや、徳を挙げて以て列に就け、無徳に類せず。能を挙げて以て官に就け、無能に類せず。徳を以て労を弇い、以て年を傷わず。此の如くすれば則ち上は困しむこと無くして民は幸生せざるなり」とあり、的確な人材登用の結果もたらされるとする。簡文の場合、『管

子』君臣上・下とは原因と結果が逆転するものの、人材登用と民の勤労を関連づける点で共通するため、「則賢臣権尽」も直接には「賞罰□、民不幸生」を受けている可能性が高い。「民不幸生」であつて優秀な人材が明確にならないわけではない、という意味だろう。とはいえず、「則」字がここでのみ用いられ、他句では用いられないこと、「則」字の前の句のみが他句とは異なり「民不幸生……」という構成をとらないことからすれば、「則賢臣権尽」は実際には「先見適【□】蜀行」以下の各句を受けている可能性が高い。民が己の為すべき役割に骨身を惜しまなかったとしても、素早く敵を察知する優秀な將軍や十分な食糧、優れた武装無くして戦争に投入しては人材を消耗するのみである。各要素が完備してこそ優秀な人材を見分け、登用し、「将」や「野」の「吏」、「官府」の「長」、「朝廷」の「正」といった位に就けていくサイクルが完成する、という意味合いと考えられる。

(3)「是故将者、審地刑、選材官、量蓄積、譏勇士、察知天下、□御機数、而凶險胆」の部分について、選陳は先の「人不幸則勇士勸之」以下、「故兵也者、審於地高、謀十官、日量蓄積、斉勇士、徧知天下、審御機数、兵主

之事也。故有風雨之行、故能不遠道里矣……」と続き、簡文のこの部分の前半と類似する。図版・模本では「刑選材官量蓄」の部分は左側が剥離してほとんど確認できないものの、とりあえずテキストに従っておく。

「材官」について、原註は選陳の「十官」を簡文により「才官」の誤りとする。また、『漢書』鼂錯伝の「平地通道なれば則ち輕車・材官を以て之を制す」を引き、漢代では歩兵を「材官」と呼んだことを指摘するものの、簡文の「材官」は「材力之士」と一般を指すらしいとする。原註のいう「材力之士」とは『漢書』高帝紀下、高祖十一年の応劭注「材官とは材力有る者なり」などによるものと思われる。簡文の「材官」を歩兵に限定しては意味的に通りが悪い、このように解釈したものだろう。簡文の「材官」が人を指すのであれば、下の「勇士」と人が重複することになり、両者がどのように異なるのが問題となる。一つの考え方として、「材官」の「官」字を重視して將軍配下の官吏や士官とみることも可能ではあるが、本篇ではこうした存在に言及されることがなく、また漢代の歩兵としての「材官」との懸隔も大きすぎる。「官」字はひとまず置いておくべきだろう。

この部分の叙述の順序は「審地刑、選材官、量蓄積、誤勇士」となっており、「地刑」と「材官」、「蓄積」と「勇士」がセットになるようである。漢代の「材官」が歩兵という兵種を指すことからすれば、原註の引く『漢書』鼂錯伝で地形と兵種を関連づける点がやはり注目される。とはいえ、簡文では「地刑」というのみで「平地通道」のように限定しない。一方、「材官」の用例として「荀子」解蔽の「天地を經緯して万物を材官す」をあげることができる。この箇所注は「材は其の分に当たるを謂い、官は其の任を失わざるを謂う」としており、この「材官」とは適材適所につけるといった一般的な意味だろう。さらに、この部分の「審地刑」・「量蓄積」・「誤勇士」は、意味的には、それぞれ先の「先見適」・「蜀行」・「有積委、久而不費」・「賞罰」・「民不幸生」を受けるようであり、「選材官」は「器械備、功伐少費」に対応しそうなものである。『漢書』鼂錯伝は、「歩兵」・「車騎」・「弓弩」・「長戟」・「矛鉞」・「劍楯」の適した地形を列挙しており、地形への対応という点で、兵種と武器の種類とは同列に捉えている。歩兵としての「材官」も本来は一般的な意味だったらしいことからすれば、「審地刑、選材官」で地形を詳細に

把握して、それに適合した装備をもつ兵種を選ぶ、といった意味と捉えることができる。

「誤勇士」の「誤」字について、原註は『詩』齊風・猗嗟「舞則選兮」の毛伝「選、齊」により、「誤」・「選」が通用するため、選陳と同じ「齊」の意味である可能性を指摘する。また『周礼』夏官・大司馬「群吏撰車徒」の注「撰は読みて算と曰う」により「誤」・「撰」も通用するため、「算」の意味でもあり得るとする。「誤」が「齊」ならば「勇士」を整然とさせる、「算」ならば「勇士」の人数を計算するということになる。『説文』言部に「誤、專教なり」とあり、「勇士」に「專教」すれば整然たる軍隊となるため、「齊」の意味に近い。しかし、前述のように「量蓄積」と「誤勇士」もセットになると考えられるため、「蓄積」の多寡によつて「勇士」の人数を計算するという「算」の方がしっくりする。『戦国縦横家書』二六章二八七行に「誤択賢者」とあり（『馬王堆漢墓帛書』『参』文物出版社、一九八三）、これからすれば「誤」は「選」の意味である。先にも述べたが「選材官」の部分は左側が剥離しており、「選」字も「誤」字の可能性がある。『周礼』大司馬の鄭注は原註の引く部分に続き「車

徒を算うるとは、之を数え択ぶを謂うなり」とし、「選」の意味に近い。ここでは「誤」を「算」と解しておきたい。「選材官」が兵種及びその装備の選択であるのに対して、「誤勇士」は兵員数の選択ということになる。

「察知天下、□御機数」の「機数」については、為兵之数に「……存乎徧知天下而徧知天下無敵。存乎明於機数而明於機数無敵」・「徧知天下而不明於機数、不能正天下、故明於機数者、用兵之勢也。大者、時也、小者、計也」・「是故器成卒選、則士知勝矣、徧知天下、審御機数、則独行而無敵矣、所愛之國而独利之……」とみえる。「明於機数無敵」の注からすれば「機」とは弩の機「数」とはそのカラクリといった意味だろう。簡文や選陳・為兵之数で「知天下」と「機数」とが連続することからすれば、「機数」を「御」す前提として天下を知っておく必要があることになる。小さな動作によつて思わぬ影響をもたらすカラクリが「機数」ならば、その出兵が直接の敵国から周辺国、さらに天下の範囲まで、国際関係にどのような影響をもたらすかを把握することが「□御機数」なのだろう。この仕組みを把握せずに出兵しては、天下を敵にまわすことになりかねない。また行軍路をど

のようにとり、どの地域を重点的に攻撃するのかによって、敵国や周辺国の反応も違ってくるだろう。それ故に以下「而図險阻」と論が展開されるものと思われる。なお、原註は「御」の上の一字が、少なくとも選陳のような「審」字ではないことを指摘している。

(4)「舟車之險・濡輪之水」以下、篇末までは地図と類似する。地図の冒頭は「凡兵主者、必先審知地図、輶輳之險、濫車之水」に作り、簡文の「舟車之險・濡輪之水」に類似する。原註によれば、地図の「凡兵主者、必先審知地図」は簡文の「是故將者、審地形、選材官、量蓄積、誤勇士、察知天下、□御機數、而図險阻」を改変したものである可能性があり、そこから869簡と870簡を連続させたという。

(5)「山陵・林陸・丘陵・沮沢・蒲葦・平易・尺魯・津洳・涂淖・大畝・深基・経溝。下沢、澦水深浅、邑の小大、城……」の部分で、地図は「名山・通谷・経川・陵陸・丘阜之所在、直草・林木・蒲葦之所茂、道里之遠近、城郭之大小、名邑廢邑困殖之地、必尽知之」に作る。

「山陵・林陸」以下の地形呼称については、前掲原宗子「銀雀山出土《守法》《守令》等十三篇の示す自然環

境―『王兵篇』を中心に―」に考察があり、それを参考にしながら内容を推測している。

「山陵」は原氏もいうように山岳で問題ないだろう。細かくみると、『説文』山部に「山、宣なり。能く気を散宣して万物を生ずるなり。石有りて高し」、阜部に「陵、大阜なり」・「阜、大陸なり。山の石無き者」とあり、「山」・「陵」の違いは石の有無ということになる。『釈名』釈山の「山は産なり。物を産生するなり。土山を阜と曰う。阜は厚なり。高厚なるを言うなり。大阜を陵と曰う。陵は隆なり。体の隆高なるなり」からすれば、「山」・「陵」は岩山と土山ということになる。続く「林陸」と対比すれば、樹木の生えていない高山地帯ということになる。

「林陸」を原氏は丘陵地とする。『説文』林部に「林、平土に叢木有るを林と曰う」、阜部に「陸、高平の地」とあり、高原の森林地帯をいうようである。また『釈名』釈山に「山中の叢木を林と曰う。林は森なり。森森然たるなり。山足を麓と曰う。麓は陸なり。水流順にして陸燥なるを言うなり」、釈地に「高平を陸と曰う。陸は漉なり。水流漉されて去るなり」とある。これらを総合すれば、山岳の中腹から山裾にかけての比較的平坦で乾燥

した樹林帯ということになる。

「丘虚」について、原氏は「丘」字のもつ多様な含意を指摘しながらも、丘上の地形に設けられた墓地とし、また『管子』などとの対比から「敵が必死で守る場所」の義も有していた可能性を指摘する。『説文』丘部に「丘土の高きなり。人の為す所に非ざるなり。北に从い一に从う。一は地なり。人居は丘南に在り、故に北に从う。中邦の居は昆侖の東南に在り。一に曰く、四方高くして中央下きを丘と為す、と。」、同「虚、大丘なり。昆侖丘は之を昆侖虚と謂う。古は九夫を井と為し、四井を邑と為し、四邑を丘と為す。丘は之を虚と謂う」とある。『説文』がわざわざ「非人所為也」とすることはそれが人為的な物であつてもおかしくないような形状を有し、また、居住地の近くにあつたことを示唆する。原氏が墓地や居住地の意味を見出したように、「丘」・「虚」は人々の身近にあつた丘のようである。それが墓地として用いられた可能性も否定できないが、さしあたっては、平地にあるぼつねんとした丘と解しておくのが妥当だろう。高山の「山陵」から中腹・山裾にかけての「林陸」、平地にある「丘虚」というように、下りの方向性をもつ叙述の流れとい

える。

「沮沢」をテキストは「沮沢」と解す。すなわち『孫子』軍争「山林・險阻・沮沢の形を知らざれば行軍する能わず」、曹操注「水草漸洳なる者を沮と為し、衆水の帰する所にして流れざる者を沢と為す」のように湖畔の草地ということになる。これに対し原氏は、テキストが、同じ簡の「險阻」では「阻」を「沮」と解し、「沮沢」では同字を「沮」と解釈していることに疑問を呈し、「沮沢」が「林陸」・「丘虚」と「蒲葦」との間に置かれていること、地図の「苴草・林木・蒲葦之所茂」との兼ね合い、「沢」が必ずしも水辺とは限らないことなどにより、「蒲葦」よりやや乾燥した小高い草地であるとみる。こうした地形用語は、ある程度文脈により判断せざるを得ない側面があり、原氏の指摘はもつともである。ただ『風俗通』山沢「伝に曰く、水草交厝、之を名づけて沢と為す」や「釈名」釈地「下にして水有るを沢と曰う。潤沢なるを言うなり」からすれば、「沢」が草地であるにせよ、水との関係の深さは否定しがたい。一方、「沮沢」が水辺の草地であつても「蒲葦」と区別されていることから、アシやガマの茂るような比較的水深の浅い平坦な水辺とは地

形的に異なると考えられる。「阻」字が「險阻」として「阻」字のように用いられていることからすれば、「阻沢」は「阻沢」とみることができると『孫子』軍争の「險阻」についての曹操注は「坑塹なる者を險と為し、一高一下なる者を阻と為す」とし、「險阻」の「阻」を高低差の大きい地形とするようである。水辺の草地でも、水面への高低差の大きい崖のようなものとみるべきではなからうか。結局のところ、原氏の説を水辺へ接近させたものということになる。

「蒲葦」については、前述のように「蒲葦」の茂る平坦な水辺と解したい。原氏は大型水生草類の茂る水辺とするが、景観的には同様だろう。

「平蕩」を原氏はなだらかな平地とし、また「蕩」が「易」の誤記である可能性を指摘する。「蕩」字については『漢書』卷七〇の賛に「陳湯は儻蕩にして自ら収斂せず」とあり、師古注は「儻蕩は行檢無きなり。蕩音蕩」とする。テキストが「蕩」と解するのも根拠がないわけではない。「平易」であっても「平蕩」であっても平坦であることに変わりはないが、叙述の順序が高山・山裾・平地の丘から水辺へ、という流れにあることからすれば、

蕩々とした水面と解すべきではなからうか。「蒲葦」の茂る岸辺の向こうにある見晴らしのよい水面ということになる。

「尺魯」については原氏も「斥鹵」と解するテキストの妥当性を一応承認し、アルカリ地とみる。異論はない。原氏も引用するように、田法篇954簡に「禿尺津」、955簡に「美霓沢蒲葦」の語がみえる。「禿尺津」は「尺魯」や次の「津洳」を、「美霓沢蒲葦」は先の「阻沢・蒲葦」を連想させる。これまでの叙述の流れが上から下へという方向性をもち、また「林陸」・「阻沢」・「蒲葦」という植生に関する記載があるのに対し、以下は上下の方向性や植生の記載がみられない。「尺魯」以下は基本的に平地で植生の貧弱な地域とみることができると「平蕩」を境に景観が一変するといえよう。

「津洳」の「洳」字について、原氏は『詩』魏風・汾沮洳の朱熹『集伝』「沮洳、水浸処下湿之地」により水際の湿地とする。また、「津」を「渡し場」として様々な川辺の湿地である可能性を指摘しつつも、「津」を「わたる」と解し、車馬の進行に渡河を要する浅瀬である可能性もあるとする。「洳」字については原氏の見解

に異論はない。「津」字については、叙述の流れを上記のように捉えれば、「渡し場」或いは上陸適地とみてよいのではなからうか。「尺魯」の次にあることからすれば、渡渉地点としては好適だが「蒲葦」とは異なる不毛の湿地なのだろう。かつて『孫臏兵法』の一部とされ、一九八五年のテキスト出版時に削除された「五度九奪」と命名された篇に「……趨適数、一に曰く、取糧。二に曰く、取水。三に曰く、取津。四に曰く取涂。五に曰く取除……」という簡があつた（張震沢『孫臏兵法校理』中華書局、一九八四、一八八頁）。渡し場の「津」と道路の「涂」をつなげる点で、この箇所と類似する。

「涂淖」について、原氏は『説文』水部「淖、泥なり」を引き、また「涂」を「涂泥」に解し、沼地である可能性をあげながら、「涂」に道路や「突き進む」の意味が含まれるともし、「津洳」以上に渡行困難な沼地である可能性を指摘する。「淖」字については異論はないが、上述の「五度九奪」篇からすれば、「涂」は「津」から続く道路とみるべきだろう。『釈名』釈道「涂は度なり。人の由りて過度するを得る所なり」や叙述の流れからすれば、不毛の地を貫くぬかるみがちな道というイメージ

になる。このように理解すれば、「津洳」「涂淖」は「津の洳なる」「涂の淖なる」と読むべきだが、他の語句との関係から読み下しは原文のままとした。

「大畝」を原氏は高畝たかうねの耕地とみる。図版・模本では確認しにくいものの、田法篇932簡に「大畝」、同937簡に「小畝」の語があり、その箇所の原註は「小畝」を一〇〇歩一畝の畝制、「大畝」を二四〇歩一畝のように、より広い面積を一畝とする畝制とみる。地形を列挙するなかで「大畝」をあげるのは、単に一区画の面積が大きめ機敏な行動をとりがたい、或いは逆に道幅が広いため行軍に便利であるなどの理由があるものと思われるが、詳細は不明とせざるを得ない。「尺魯」・「津洳」・「涂淖」といった不毛の地を進んで、ようやく耕地に達したところだろう。戦国の魏では農地の一区画を百畝としていたが、鄭県は「斥鹵（鳥鹵）」の地であるため二百畝を一区画としていたことが『呂氏春秋』楽成や『漢書』溝洫志にみえる。ここまでの叙述の流れも「大畝」という畝制が辺境や新開地に導入されたものであることを支持する。

「深基」について、原氏は「深」を切り立った様と解し、また、『説文』土部「基、牆始なり」を引きつつも、「基」が自然の山裾を指す場合もあるとして標高差の高い台地の崖とする。しかし、こうした景観は先の「山陵・林陸」に含まれるのではなからうか。「大畝」の次にある「深基」や、また次の「経溝」を自然の景観と捉える必然性はそれほどない。原氏は「尺魯」までが類似の意味の二字を並べているのに対し、「津洳」以下は文字の構成が異なるとみるが、それは「津洳」以下に「津」・「涂」・「畝」といった人工的気配の濃厚な文字が混じってくることに無縁ではないだろう。「基」字も『説文』に従って城壁などの建造物の基礎・土台部分と捉えて特に問題はない。「深」は原氏の指摘するように、上から見下ろす視角の言葉であり「高」と同様の意味をもつ。高さがあり、基礎部分かなり下方にみえる建造物を「深基」というものと考えられる。たとえば、県城などの城壁や戦国諸国の築いた長城、或いは亭伝などの建物やその牆壁が該当しよう。また、「深基」が「経溝」の前に置かれることからすれば、堤防などを含む可能性もある。こうした建造物の多様さ故に「深基」と総称したのだろう。

続く「経溝」について、原氏は「溝」に沿って行く意味と解釈し、断崖絶壁の上や中腹に沿って細い道が通じている地形とみる。しかし、やはりこうした景観も「山陵・林陸」に含まれてよい。『説文』水部「溝、水瀆なり。広四尺深四尺。水に従い葦声。瀆、溝なり。水に従い賣声。一に曰く、邑中を溝と曰う」からすれば、「溝」も「畝」・「基」同様に人工物の色彩が強いようである。また、『周礼』夏官・司險に「国の五溝五涂を設けて之が林を樹え、以て阻固と為す」とあり、注は「五溝は遂・溝・洳・澮・川なり」という。「溝」は「広四尺深四尺」の小さな水路を指すとともに、大小の水路の総称としても用いられるようである。さらに『釈名』积水に「水の谷に注ぐを溝と曰い、田間の水も亦た溝と曰う。溝は構なり。縦横相い交構せるなり」とあり、自然河川も「溝」とされる。つまり、大小の人工の用水路から自然河川まで、あらゆる水流が「溝」と呼ばれ得ることになる。一方、「経」については様々な解釈が成り立ち得るが、『釈名』の「縦横相交構」からすれば『説文』糸部「経、織の従絲なり」により、「たてにまつす」とみるのが妥当だろう。「溝」はあらゆる水流を指し得るし、「縦横相交構」

するように枝分かれもしている。「経溝」とは、そうした「溝」のなかでも、直線的になるよう人手を加えられた基幹となる水路を指すのではなからうか。『周礼』夏官・掌固に「凡そ国・都の竟に溝・樹の固有り。郊も亦た之の如し」という。基幹となる直線の水路が国都や県などの防衛ラインとなる可能性は十分にあるだろう。

以上のように地形を推測すれば「山陵・林陸・丘虚」で地形の凸、「沮沢・蒲葦・平蕪」で凹、「尺魯・津洳・涂淖」で不毛・未開発の平地、「大畝・深基・経溝」で開発が進んだ平地ということになる。続く「下沢」について、原氏は「蒲葦」・「尺魯」・「津洳」・「涂淖」のいずれにも該当する下湿地一般の意味で用いられることが多いことから、「山陵」以下の呼称の列挙は「経溝」までであり、「下沢」は下の「滅水深浅」にかかる可能性を指摘する。原氏の指摘はもつともなものと思われる。ここまでみてきたように、「経溝」までの地形の列挙はそれなりに脈絡をたどることができるが、それに「下沢」が続くとなると、もはや脈絡を追うことはできない。原氏の指摘に従い、「下沢」は下句にかかるものと理解したい。

「滅水深浅」の「滅」字について、原註は「測」の異体字とし、「賊」は本来「戈」に従い「則」声であることを指摘する。『広雅』釈言に「滅、測也」とあり、原註の解釈に異論はない。なお、「賊」字が「从戈則声」であることは『説文』戈部にみえる。

(6)「……入相錯者、乃可以行軍围邑。举措起居、知先後、毋失地便」の部分に相当する、地図の「名邑廢邑困殖之地、必尽知之」以下の部分は、「地形之出入相錯者、尽藏之。然后可以行軍襲邑。举措知先後、不失地利」に作る。簡文は「毋失地便」に直接「王兵者必三具」と続くが、地図では「不失地利」以下「此地図之常也。人之衆寡・士之精麤・器之功苦、尽知之。此乃知形者也。知形不如知能、知能不如知意」と続き、その後に「故主兵必参具者也」の句が来る。

「举措起居」は手の上下動と身体全体の上下動とを自軍の行動の比喩に用いているのだろう。「知先後」とは、行軍の際や休憩地点・宿営地の選択において、周囲の地形を把握しておくことをいうものと考えられる。

(7)「王兵者必三具。主明、相文、将武」を、地図は「故主兵必参具者也。主明・相知・将能之謂参具」に作り、

原註は地図の「主兵」を「王兵」の誤りとみる。

「文」・「武」の対比は兵令篇の960簡から962簡にかけてもみられる。「文」は「武」以外の文徳・礼文・文飾・文辞等々を意味し得るが、下文の「相国」の職務からすれば『左伝』僖公三十三年「文は順を犯さず、武は敵を違けず」により、道理に順うとでも解すべきかもしれない。下文「論功勞、行賞罰、不敢隱賢、使百官共敬悉畏」からすれば、功勞を論じ、賞罰を行うには的確に、賢者がいれば拔擢し、百官をしてその身を慎ませることが「文」の内容なのだろう。

(8)「主事者、将出令起卒有日、定所欲功伐国、使群臣・大吏・左右及父兄毋敢議於成。主之任也」を地図は「故将出令發士、期有日数矣、宿定所征伐之國、使群臣・大吏・父兄・便辟左右不能議成敗、人主之任也」に作る。

原註は「主事」を君主の事を指すとみる。下文「相国者」・「大將者」との兼ね合いからすれば、「主事者」が「事を主さざる者」である可能性もある。ただ「主事者」を「主之任也」で結び、「相国者」ではこうした結語が入らないことからすれば、ここだけが「主の事」であつてもおかしくはない。とりあえず原註に従つておく。

「将出令起卒有日」は、地図の「期有日数矣」からすれば、余裕をもつて日程を定める、という意味でとることができるが、吉凶をはじめとするその他の諸事情を判断して日取りを決める、という意味かもしれない。中国古代の戦争において地利・人事の他に天時が重視されたことは、先に引いた『左伝』成公十六年の晋・楚の戦争において、晋側が楚の弱点を指摘するなかで「陳すに晦を違けず」と指摘し、注が「晦は月終、陰の尽、故に兵家は以て忌と為す」とすることから窺える。将軍が号令を出し、挙兵する際も同様だろう。

「群臣・大吏・左右及父兄毋敢議於成」の「毋敢議於成」は、地図の「不能議成敗」とはやや意味合いが異なり、「成」以外の議論はかまわない、というニュアンスを読み取ることができる。この「議」が「処士横議」のような私的な議論であれば、「群臣・大吏……」などと対象を限定する必要はない。おそらく朝廷における集議を想定したものであり、それ故に対象を限定し、「毋敢議於成」という微妙な表現が用いられているのだろう。漢代における集議の種類や参加者などに関しては永田英正「漢代の集議について」(『東方学报』京都、四三、一九七二)に

詳しいが、それからすれば、この部分の「群臣」とは漢の大夫・博士・議郎といった議臣に相当するものかもしれない。「大吏」は市法篇879簡にも「……必大吏能平均、下吏能毋割利焉」とみえるが、漢の三公・九卿に相当する高官だろう。「左右」は漢の侍中などに相当する君主の側近、「父兄」も君主のそれだろうが、君主よりも世次が上の諸父諸兄を指すのだろう。漢代の朝廷での集議には列侯が参加するものがあつたが、「父兄」とはそれに相当するものかもしれない。

(9) 「相国者、論功劳、行賞罰、不敢隱賢、使百官共敬悉畏、毋敢□隨行□、以待主令」に相当する部分を地図は「論功劳、行賞罰、不敢蔽賢有私、行用貨財、供給軍之求索、使百吏肅敬、不敢解怠行邪、以待君之令、相室之任也」に作る。

原註は「隨」の上の一字について、下部が「心」に従っており、「怠」字の可能性があるとし、「怠隨」は「怠惰」の意味である可能性を指摘する。

(10) 地図では「大將者□□……」に相当する篇末の部分を「繕器械、選練士、為教服、連什伍、徧知天下、審御機數、此兵主之事也」に作る。

(訳文) ……將軍がいなければ早く知ることとはできない。地方に官吏がいなければ穀物の備蓄がなく、官署に長となる者がいなければ(武具などの)器物が使い物にならず、朝廷に国政を総べる者がいなければ民は命あるを幸いとして怠惰になる。先んじて敵を発見すれば無人の地のよう如意のままに行動でき、十分な備蓄があれば長期の出征でも飢えることなく、器物が完備していれば戦争での消耗が少なく、賞罰が……であれば民は命あるを幸運とせずに勤勉になり、その結果、賢臣が尽く見出される。このために、將軍たる者は地形を知り抜いてそれに適合した兵種や武器を選び、備蓄を量って勇士の數を計算し、天下の形勢を察知したうえで(国際関係の)カラクリを統御し、險阻の地を把握するのである。船や車では越えることのできない難所から車輪を濡らす程度の水たまり、植物の生えない高山・山麓の森林・平地の丘陵・(切り立った?)沼沢の岸辺の草地・葦や蒲の茂った水辺・広々とした水面・不毛の地・湿気の多い渡し場・ぬかるんだ道路・区画の広い耕地・高さのある建造物・まつすぐな水路などである。沼沢地では水深を測り、邑の大小や城郭の……入り交じったもの、そうしてはじめて行軍

して邑を包囲できるのである。自軍の行動においては地形の順序を把握し、地の利を失うことはないのである。王兵というものには三つの要素が備わっている。君主は賢明、宰相は道理に順い、將軍は勇敢なことである。君主の事とは、將軍が命令を発して拳兵する日取りを決め、討伐しようとする国を定め、群臣・高官・側近・王族の議論が事の成否に及ばないようにさせる。これが君主の任務である。宰相たる者は、功勞を検討して賞罰を行い、優秀な人材を隠蔽せず、百官が身を慎んで……することなく、そうした態度で君主の命令を待たせる。大將たる者は……

〔付記〕 本稿は二〇〇四年度文部科学省科学研究費補助金

（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

（なかやま しげる 日本学術振興会特別研究員）